

「人とコウノトリが共生できる地域・自治体づくりに向けて」

2020年3月2日（月）、兵庫県豊岡市役所で、“コウノトリも共に生きられる地域・自治体づくり”という視点から、これまでの取り組みと到達点、これからの取り組みの方向性について、中貝宗治市長から直接お話を伺った。以下に、その内容を報告する。

話し手：中貝 宗治氏（豊岡市長）

聞き手：笹川 孝一（法政大学、部会長）、朝岡 幸彦（東京農工大学）、芝原 達也（谷津干潟自然観察センター）、日置 光久（東京大学・海洋教育センター）、田開 寛太郎（松本大学）、河村 幸子（東京農工大学大学院博士課程）、石山 雄貴（鳥取大学）

笹川：2018年のラムサール条約第13回条約国会議（COP13）（ドバイ）で中貝さんとお会いしたときに、「現在、野外コウノトリが100羽を超えて、『コウノトリと一緒に棲める地域』という理解が必ずしも十分に周知されておらず、コウノトリ野生復帰の新たな目標設定をしなければいけない。」と伺いました。本日は、日本湿地学会「湿地の文化、地域・自治体づくりとCEPA・教育部会」の調査研究のひとつとして、コウノトリ野生復帰の取り組みが、現在どこまで進んでいて、何が課題となっていて、それがどのように進みつつあるかについてお話を伺いたと思います。

■ 「昔は川の水よりも魚が多かった」

中貝：2016年9月に、「第2次豊岡市総合計画策定に係るまちづくり市民アンケート」を行いました。その結果のひとつには、豊岡市がこれまで取り組んできた施策についての「満足度」を調べたのですが、「コウノトリと共生する豊かな自然、及び文化の保全・再生・創造に関する取り組み」に対しては満足、やや満足していると、両方合わせて50%近い結果となっています。また、施策の今後の取り組みについての「重要度」に対してはあまり重要でない、重要でないといった回答が見られます。実際に、わたしも市民の皆さんと関わる中で、「もう100羽以上のコウノトリが空を飛ぶようになってきて、野生復帰の目的は達成したのではないか。」「もうコウノトリがありふれた存在になっているのではないか。」といった声を聴くようになりました。わたし自身、29年間、野生復帰を進めてきましたが、その気持ちが平穏の状態になってしまい、みんなに「（コウノトリの取り組みは）これでいくぞ」という熱気はなく、淡々と物事が進んでいます。

いっばうで、野生復帰の目的を果たしたかどうかをあらためて考えてみたいと思います。ひとつは、象徴的には、飼育員の松島興治郎さんが「昔は川の水よりも魚が多かった」とよくおっしゃるのですが、そんなバカな話はないと思うのですが、わたしにはその様子がよく分かります。わたしは1954年生まれですが、小学校の頃までは本当にたくさん魚がいました。身近な川でアユも20匹、30匹と取れましたね。カワムツも繁殖期になると紫色になり、わたしたちはアサジと呼んでいましたが、浅いところだと本当に、うじゃうじゃいました。わたしよりもひと回り年上の松島さんから言わせると、川の水より魚が多いといったことはあり得るだろう、とわたしは思うのです。今、いなくなったコウノトリが戻り野外に普通にいますから、野生復帰の目的を果たせたと思うのですがそうではなく、かつてのそのような水環境が戻ったかどうかは疑問が残ります。

次に、一体どのような言葉でこの野生復帰の目標を再定義したらいいのかを考えるために、元兵庫県立大学講師兼コウノトリの郷公園の研究者であった菊地直樹さん（現在、金沢大学准教授）との共同研究を進めました。彼は、2002年に高齢の方々（1920年代から30年代生まれ）に膨大なインタビューを行い、昔のコウノトリがいた頃の様子などを聞き取り、テープ起こしされました。それを確認していくと、ある人は、「船を使って魚を取っているときに、当たりがあると船が沈むかと思うほど魚が取れた。」、「大水が出ると水路をフナとかコイが、何10本、何100本と群れをなしてあがってくる。」、そして、「その背びれで水が見えない。」と言うのです。またある人は、「水路の中の草刈りをしようとする、魚が当たってきてよるけるほどであった。」、「水を田んぼに入れるために石板で堰くと、下流の水がなくなり、ナマズが上流に水を求めてきて、そのナマズの上にまたナマズがいて、ツダツダになっていて、それをスコップですくっていた。」と。1人や2人ならそんなバカなどは思うのですが、そのような思い出がたくさん出てくるのです。時間の経過があるため、多少オーバーにお話されているとしても、総じてそうであったのではないかと思います。これも100年も200年前の話ではなくて、現在70歳の松島興治郎さんが小さい頃に、お話と近い自然があったと言うことは間違いのないと思います。そして、現在、そのような自然環境を取り戻す、といった作業がまだ残っています。コウノトリについては「コウノトリを野生復帰させよう」と一言で済んだのですが、むしろ、そういった象徴的な思い出を集めて、そのような世界を取り戻すために、かつての状態をどのように説明するかということが問題です。

■ 「コウノトリも暮らせる豊かな自然を市民と再生するために」

中員：2018年3月に、「豊岡自然再生アクションプラン」を作成しました。既に、豊岡市内に21カ所の人工巣塔があり、10年以上の自然繁殖の歴史があります。毎年のようにヒナが育つ巣塔もあれば、全くそうではないところもあります。問題は、この違いはどこから来ているか、ということです。コウノトリの個体差は些少なことであり、周辺の生息環境の良し悪しが人工巣塔の繁殖成功率に関係している、と考えました。生息環境について思い付くものを挙げていきますと、田んぼの面積、田んぼの中でも「コウノトリ育む農法」の面積、水路の長さ、道路の幅員、そして、開空度（その場所の地形がどの程度起伏に富んでいるかを定量的に表す指標）があります。田んぼと言っても、100メートル以内か200メートル以内かと、組み合わせは無数にあるわけなのですが、それをコンピューターで解析してもらいました。

解析の結果分かったことは、人工巣塔からの距離が300メートル以内に水田がどれほどあるかと、水田の面積と正の相関にあるということです。また、「コウノトリ育む農法」の水田には餌がいっぱいありますから、人工巣塔からの距離が500メートル以内にどれだけの面積があるかということも正の相関にあります。次に、不思議で驚いたのですが、道路の幅員が正の相関にありました。わたしたちの解釈では、道路がしっかりと整備されているところは農業が守られている、のではないか、そのことを反映しているのではないか、ということで、道路は長い方が良いということがわかってきました。

コウノトリの生息環境としてのポテンシャルが高い、中程度、低い3段階を、言うなれば、Aランク、Bランク、Cランクというふうにします^(注1)。そうすると、人工巣塔がないところでもAランクになるところ、Bランクになるところがスコアとして見えてくる。また、Cランクのところ人工巣塔が立っていたら、高ランクのところに移設すると、繁殖がより進むのではないかとすることも考えることができます。もうひとつは、自然再生を行う場合、どこにエネルギーをかければ効率的に対応できるのか、という可能性をもっています。例えば、「Aランクに相当するところは、毎年、繁殖しているので生きものが豊

かな場所と仮定し、よしとしましょう」、「Cランクは、相当エネルギーを入れてもなかなか繁殖できるような環境にならないのではないかと考えると、Bランクに自然再生のエネルギーを集約することで効率的に豊岡市全体の環境をよくすることができるのではないかと」、と狙いを定めることもできます。

試験的に自然再生活動を行う場所として、Bランクの2カ所をパイロットエリアに決めました。ここは構造的な問題もありますが、いろいろな技術を導入するなど、例えば、深く掘ってどのような時でも水が出るように意識するとか、稲刈り後にあえてぐちゃぐちゃにして湿地の状態を保つとか、色々な技を駆使します。そのようなことを行って、いまの状態から生きものが増えるかどうかを検証します。自然再生を行う前に生きもの調査を行い、モニタリングをして、いろいろな作業をした後に、本当に生きものが増えるかどうかを確かめて、有効に生きものを増やすことができるとするならば、後はその他のBランクのところに今後、活動のエネルギーを集中していけば良いということが実証できます。まだパイロットエリアの「鳥居」と「日野辺」の作業は途中ですが、日野辺エリアの活動内容としては、休耕田を水田ビオトープにしたり、育む農法水田（減農薬）をわだち（轍）マルチトープにしたり、また、素掘り排水路を年中通水したりしています。鳥居エリアでは、わだちマルチトープにしたり、慣行農法圃場を育む農法にしたりしています。

「地域の方と一緒に自然再生をやっぺいこう」ということでは、人々の気持ちを鼓舞するのは、魚が水よりも多いといった状態を実際に取り戻して見せることではないかと考えました。そのため、できるだけAランクに近いところから進めていくのですが、途中から気づいたことは、この評価・環境条件は水よりも魚の方が多いいった状態ではないということです。Bランクの生物量をAランクの生物量並みに上げるという作業は、これはこれで続けていかなければならないのですが、単に全体の平均値を上げていることに過ぎないということです。切り替えて、生きものが豊富なエリアとして「特A」を作ろうよと言っても、何人かの専門家に聞いたところでは皆さん不可能だとおっしゃいました。例えば、自然というものは、山や川、周辺の人間の関係から、いろいろな要素が関わっているんで、当然そのようなことはできないというのが答え、でした。

しかし、大きなエリアでは不可能かもしれませんが、もっと狭いエリアで絞ってしまえば、そこに魚がうじゃうじゃといる湿地の状態というのはできるのではないかと、と問いかけをもう一度返しました。そうすると、ハチゴロウの戸島湿地や田結湿地という2つの象徴的な湿地がありますから、「ここならそれに近いところまでいけるかもしれない」、と言うのです。新年度から、この2つの湿地で具体的な作業を進めていこうと思っています。そこでもし、本当に魚がうじゃうじゃとか、カエルがうじゃうじゃとか、そのような状態にできたら、それは出来る限りしたいですね。

大きな堤防を作ったり、7ヘクタールの土地を買ったりと、国交省と一緒にしなくてはなりません、様々な組み合わせもできるかと思ひます。まずは多くの人にとりあえず見てもらい、子どもたちを連れて見てもらってから「こういう自然がいいよね」となったときに、エネルギーが生まれてくる。「自然再生をなぜやるのか」とそこを突き動かすように、人々の中に入って行くのではないかと思ひます。今の状態はみんな、どこか満腹感があり、もう「できた、できた」という状態にあって、情動というか、情念がないわけですね。そのようなものを作ろうというエネルギーを、みんな失くしてしまっているというか、そこが冷めたような状態になっています。突き抜けたものを見てもらうことを通じて、「やっぺい、これだ」というように、みんなの気持ちを鼓舞していく必要があると思ひます。そのようなことに新年度、わずかですが予算をつけてやっぺいこうとしている、今はそんな状況です。

笹川：ありがとうございます。本日、加陽湿地を視察しまして、地元の方から小さい頃は大きなコイがいて銚で突いたとか、アユもたくさんいたなど、当時のお話を伺いました。彼らの話からは情念がほとぼしってるのですよね。だから、それは潜在的には誰にでもあって、それをどうやって引き出すか、ということではないかといった感想を持ちました。

中貝：そのような思いを持って、威勢切ってお話するのは年寄りばかりなんですよね。子どもたちはそのような昔のイメージすらできない、といったことがあります。この自然再生活動は、若い人にバトンをつないでもらわないといけないけれども、若い人たちにとっては意味がわからないし、見たことがない。おそらく、わたしの息子たちも見たことがない。ましてや、孫の幼稚園、小学生の子どもも同じ。みんなの気持ちを鼓舞するためには、先ほども言ったように具体的に理想的な環境を作ることが必要なのではないかと考えています。

海外、アジアの方でそのような景色や環境を見たことがある人は現にいますので、不可能ではないと思います。そこをもう一度、みんなの気持ちを束ねていってベクトルを合わせていく必要がある。しかし、みんな頭ではわかっても動かない、ということだと思います。それに比べると、コウノトリに関してはものすごい強烈なモチベーションを持って、「あんな大きな鳥が空を飛んだら素敵だよ」と取り組むことができる。ですから、手順としてコウノトリに関する取組みをやっていく必要がある、と思っています。

■ 「ラムサール条約の自治体認証について—湿地を生かした地域・自治体づくりを進めるために」

笹川：COP13で韓国5カ所、中国5カ所、フランス2カ所、チュニジア1カ所で「ラムサール条約の湿地自治体認証」が行われました。日本ではなかなか進まなかったこともあります。ようやく去年の10月に環境省のホームページにアップされて公募が始まり、それに新潟市が手を挙げて日程的には間に合いそうだと聞いております。

これは強くお勧めするとかそういう意味ではないのですけれど、やはり中貝さんがずっとコウノトリの野生復帰や自然再生をはじめ湿地を生かした地域づくりを進めてこられ、合わせて市役所の方や地域の方も一緒に進めてきたということでは、豊岡市の全エリアをそのようにしていくことの可能性があるのではないかと考えています。確かに、円山川下流域・周辺水田や加陽湿地は、それはそれで素晴らしい湿地としての“点”でありますし、今の田結湿地やハチゴロウの戸島湿地にしてもそのようにして捉えることができます。ラムサール条約は何も鳥を守るといったことだけではなく、水とのつながりを考える必要がある。水の命、人々との暮らしをつなげていくという点では、豊岡市は自治体認証を受ける地域として当てはまり、認証制度を活用されるといったことも、先ほどの情念と関連して、やはり最初に制度を受けることを検討されても良いのではないかと考えています。その点については、いかがでしょうか。

中貝：ひとつは、制度自体をもっとみていく必要があると思っています。このことに限らず、いま豊岡市は認証制度にあまり関心がないのです。なぜかと言うと、認証自体の効果がほとんどないからと考えています。例えば、世界ジオパークというものがありますが、認証を受けて経済が活性化したか、と言われれば全く実感がありません。世界遺産は人がやってくるので多少の効果はあるかもしれませんが、効果

があるのは3年だと言われています。また、大河ドラマは1年、あつという間にブームは収まります。

むしろ認証というバッジを取るよりも、実質を高めていかなければならない。これまで豊岡を訪れた方に十分対応できるような体制があったかと言われると、そうでもない。泊まるどころ、土産物、おしゃれなカフェがあるかが問われていて、それがないとバッジをとってもほとんど意味がないのです。つまり、バッジ自体に意味があるのではなくて、やるべきことがセットになってないといけないのです。コウノトリ育む農法もおかげさまで428ヘクタールに広がり、国内でもお米がよく売れています。また、輸出も6ヶ国始まっていますが、ここまで来るまでにはほとんどない努力があって初めてブランド化できてるのです。それは、安心・安全のお米、生きものを増やすといった認証制度を作っただけでは、実は誰も買ってくれないのです。そのお米の意味をちゃんと伝えることと、食味を良くしたり、また、職員も海外に出かけて一ヶ月帰ってこなかったこともあるのですが、実際に現地・スーパーに売り込みに行ったりと、努力を惜しみません。オーストラリアに行って、成田経由でそのままアメリカのニューヨークとロサンゼルスに行って、やっと帰ってくるということもありました。そういうものがセットでないと、認証自体に意味はないのです。

いま、認証制度にいったいどのような努力を重ねていけば良いか、そのところがまだ十分にイメージが見えていない、ということだと思います。豊岡市が認証を受けると、環境省やラムサール条約の事務局などから、もちろんPRはしていただけるのですが、ただ、豊岡が認証制度を活かすためには結局、労力を割いて駆けずり回らないといけない。そこにエネルギーを費やすのがいいのかどうか、そのあたりの議論だと思います。

以前に、いちど担当者からこのような制度の動きは聞いていましたが、そのときはまだ十分なことではないということで、その後、特に議論はしてませんが、今後状況を見ながらどうするかということ、あらためて考えたいと思います。

■ 「コウノトリ育む農法とマーケットの拡大」

笹川：コウノトリ育む農法のお米などのブランド米は、香港などのある階層は買いますね。農法が確立して技術的な改善があるという話と、売るシステムなどJAを介してしっかりとできているという話の中で、かなりターゲットに狙いが定まり絞られていると、わたしが4年前に豊岡市に訪問し聞いた時よりも、進んだなといった印象を持っていますが、その点はいかがでしょうか。

中貝：海外進出の時に、ターゲットがむしろ明確になったと思います。なおかつ、海外でいま米を売ろうとすると、日本はそうではないのですが、有機栽培が必須なのです。GLOBALGAP認証や、少なくとも国内の有機JAS認証をとっていることもほぼマストという状況になってきていますので、よりわたしたちの意識が明確になってきた、ということだと思います。香港では1kg 1,250円、ロサンゼルスでは2,000円で店頭で売られていて、よっぽど売る人自体が情熱を持たないと売れない。

そのため、わたしたちの作戦は、消費者にダイレクトに働きかけはしないといったことがあります。とてもそういうエネルギーはないのです。わたしたちにはコマーシャルを流すような力はありませんので、売る人を「ほろっ」とさせて豊岡の味方に加えよう、といった作戦です。それには、バイヤーや商社の社長、担当部長、担当者などにコウノトリの物語を懇々と語り、また、現場を見てもらい、その人たちが「これは特別な米」だと感じてもらう。そして、このお米を売ることによって、「消費が増えれば生産が増え

て環境が良くなるという貢献ができる」といった担い手をとにかく作ること、その後はそのような人たちが自分自身の想いとしてやっていただくという、そういった作戦も含まれますね。

笹川：泡盛についても、そのような作戦があると伺っています。タイ米じゃないと泡盛の香りが出ないと蔵元の方たちはおっしゃっている一方で、若い人たちは泡盛の独特の匂いが好きではないと同時におっしゃっていて、そのため、その蔵元の方たちが豊岡まで足を運んで稲刈りをされたという話を聞きましたが、いかがでしょうか。

中貝：株式会社サンエーという、沖縄にある流通グループと10年以上のつながりがありまして、いま、年間316トンを一社で消費していただいています。

実は、コウノトリ育むお米を作る人はいろいろですから、かなりばらつきがあります。みなさん有機、無農薬がおいしいと思っているのですが、本当はそうではなくて、下手をすると有機の肥料は効きが悪いです、やりすぎてしまう。そうすると、タンパク質が多くなりすぎて、まずくなってしまう。化学肥料は短期で量を加減ができるので、農家の人たちもよっぽど化学肥料を使ったほうが「うまいね」とおっしゃるのです。そのようなクレームが入ってくるので、作り方の技術開発、改善を図ったことがこれまでにありました。その頃ある農家が、粒を大きくしたらうまいって言ったので、通常は1.85ミリのふるいに掛けて振り落としますが、わずかに大きくして1.9ミリにしたそうです。そうすると、1.9ミリ以上のものが残りますが、大きな粒というのは熟成し栄養がしっかりあり、食べた食感も良いということで、その後クレームはほとんどなくなったということです。ところが、くず米が増えてしまい困っているところにサンエーから助け舟を頂いたといったご縁があります。我々からコウノトリ育むお米を使ってお願いしたのではなくて、サンエーからコウノトリ育むお米の流通に困っているだろうということで、サンエーとの取引先である蔵元に話しを持ち掛けて、初めて国内産の米を使った泡盛ができたといった経緯です。このお酒は独特の臭みがないということで、これはこれで、よく売れています。

以上の取組みは、サンエーの方たちがコウノトリの取組みに、深い共感を持ってくれたということだと思います。わたしも何度か沖縄を訪れ、サンエーの店長や副店長の方たちを何百人と集めてお話をしたり、売り子の責任者を集めてその方々にコウノトリの絶滅と復活の物語のお話をしたりして、このお米はそういう意味で本当に特別な米なのだ、皆さんに伝えてきました。そのおかげで、「生産が増えて、コウノトリの数がどんどん増えています」と言うと皆さんやる気になって、売り場で1番良い場所に置いていただいて、ディスプレイが曲がっていたら元通りにしたり、商品棚が減ってくるとまたちゃんと出したりなどと、非常に売り場で可愛がっていただいています。

繰り返しますと、そういう人たちを作っていくということが、豊岡の作戦なのです。それは長いコウノトリの取組み、環境保全のような取組みは、みんなが誰かに協力しているようではなかなか続かなくて、自分の問題として取り組もうと思う人をどれだけ作るか、そのためにはどれだけ共感を生み情に訴えられるか、そのところをすごく重視していくということですよ。

■ 「つながりの中に自分がある—わたしたち人間は何に生かされているのか」

芝原：私はこの2日間、いろいろと体験させていただいて感じたのですが、やはり生産性とか売り上げとか数字も大事なのですが、中貝さんが最初におっしゃったような「魚が川の水より多い」、それはつまり、

「自然の中にわたしたち人間は生かされている」、ということが大事になってくるのだと思っています。先ほどある絵を見せてもらったら、真ん中にお地蔵さんがいて、コウノトリがいて、その後ろには山があって、という風景画ですが、生かされているという感覚になったときに初めて、これは大事なものだと思いました。コウノトリを増やすということは、どこか私たちがコウノトリを増やしてやっていると一方向的な感覚だと思うのですが、実際はそうではない。何度も笹川先生が「食べる」ということが大事だとおっしゃっていますが、まさに「食べる」ということは「生かされている」という実感にもつながることだと思うので、魚を増やそうとした時に、魚をどうやって食べるかまで、取り組まれる必要があると思っています。そうしたことを踏まえて、豊岡市環境経済戦略の中に、売り上げといった指標はあるのですが、例えば、精神的な、内面を評価する指標も必要になるのではないかと思うのですが、その点についていかがでしょうか。

中貝: お話にあった風景画は、城崎温泉の椿野ひろしさんのお地蔵さんとコウノトリの絵ですね。おっしゃる通りだと思います。

いま豊岡の学校給食は、すべてコウノトリ育むお米の減農薬タイプを使っています。もともとのきっかけは、小学生たちがわたしのところに来て、「新田小学校プロジェクト E」の環境活動の一環で、自然と人間との関わりを考えたいということでした。その時に、コウノトリの野生復帰が始まり、子どもたちが勉強していく中で、米の消費が増えれば生産が増えるということを知り、学校給食で消費することを子どもたちは考えました。このプロジェクトの1年間の活動報告の表紙のタイトルには、「つながりの中に自分がある」と書いてあって、それは見事な子どもたちの意識で、私も「参りました」と言うくらいでした。あの子たちは、活動を通して「生かされている」ことがわかったと思うのですよね。それがあの子たちのエネルギーになって、それは同時に、わたしたちにとっても同じことが言えると思います。

「コウノトリ育む農法」は、助詞がないのです。それはあえてそうなっていて、コウノトリ“を”育む農法であり、コウノトリ“が”育む農法なのです。コウノトリ“を”というのは、コウノトリをはじめ、すべての生きものを指すのですが、農薬や化学肥料を使わなかったり、冬に水を張ったりすると生きものが育まれます。カエルが増えると、カメムシを食べてくれる、ツバメがやってきて害虫を食べてくれる、朝早く行くと田んぼはクモの巣だらけでクモが害虫を食べてくれる。だからまず殺虫剤がいらない。もうひとつは、除草剤など農薬を使わずに冬に水を張っていくと、春先にイトミミズが大量に発生して、イトミミズが田んぼに頭を入れて有機物を分解して糞をすると、トロトロ層という粒子の細かい層ができます。コナギ対策としては、コナギが落ちてきてしばらくしてかき混ぜてやると、トロトロ層の細かい粒子と混ざって、やがて種が重たいので下に沈み、その上からトロトロ層が積もります。コナギの種は3センチ以上、土の下に埋めると発芽しないという性質があるので、冬眠させることができ除草剤がいらない。

つまり、コウノトリ“を”育むと、コウノトリ“が”田んぼを育んでくれる、という意味があります。もうひとつの天敵はヒエです。深水管理でやると生きものがコウノトリ育むお米を育んでくれるということで、生きものがいっぱい田んぼを作りたい、というのがコウノトリ育む農法の基本設計であり、思想なのですよね。そして、その生きものに関心を持つ農家を育てたい、ということがあります。

今後、スマート農業が始まり、無人の田んぼが出てくるかもしれない。そうしないと、若い人たちが参入できないし、お年寄りも労働が大変ですから、コウノトリ育む農法といえどもスマート農業の方向に

行かざるをえないと思っています。ドローンを使うと、高解像度カメラで見て、害虫がいるところだけを、ピューッと殺虫剤をかけることができます。

ただ、コウノトリ育む農法の基本コンセプトは生きものに関心を持つことなので、そのところが最後の砦だと思っています。コウノトリ育む農法はそもそも農薬を使わないことを前提としていて、どのようにしたら農薬を使わないようにできるか、生きものを増やすかなどを考えること。米の品質が同じものができるとしても、コウノトリ育む農法の最後の砦はここにある、ここだけが多分、差別化できる要素になるであろうと思います。それは“命”であり、子どもたちが言うような「つながりの中に自分がいる」という認識そのものだったと思うのです。

笹川：日本人だけじゃないかもしれないけど、雨の多い、水の多い所に住む私たちは、そういった“命”の連鎖のなかに自分がいると感じざるを得ないと思うのです。ホームページに出ている、よく写真で見られるコウノトリだか、人だか分からないような写真があるでしょう。あのような風景をどのように感じるかの発想が大事である、と思うのですね。人間と自然といった二元論、イスラム教やユダヤの地というかですね旧約聖書、新約聖書、また、そのヨーロッパの中であっても北欧などは基本的にはそういう発想はないと思っています、さらに、わたしたちの言語はヨーロッパが作った学術体系の中の言葉に、わたしたちの感覚を合わせようとしているというね。

そのような状況の中で、あらためて大事な発想だと思っています。我々が“命”のつながりの中にいて、そこで限られた“命”の循環の中で生きている、そのところが多分、中貝さんや豊岡市の皆さんは取り組まれようとしているのではないかと思うのです。そこをもっと強調して、“命”のつながりの中に私たちがいる」というのを全面に出していくと、日本全体が変わっていくのではないかなと思いますね。

中貝：その通りだと思います。ただ、それをやろうと思えば、教科書を読んだだけでは分からない。現場の中に入るから、実感できるのですよね。昔の人たちはまさに、うじゃうじゃの魚たちの中にいて、かつては水路と田んぼも同じ平面ですから、松島興治郎さんもおっしゃっていたことですけれども、「昔は田んぼの中に草取りをしに入っていくと、コイやナマズがびゅーっと走るのでそれどころではなくて、ひたすらコイを取っていた」、みたいな経験の中で、“命”のつながりと関わってこられたのだらうと思います。

わたしのところに学校給食に使ってくれと言った当時の小学生のリーダーの女性は、いまはもう25歳ですけれども、彼女を主人公にしたドキュメンタリー映画があります。イスラエル人が作ったものですが、その映像の中で、小学生の彼女たちは田んぼの中に入っているのですよね。その時に勉強したことは、それはそれは「面白かった」と言っていて、学校の中で学ぶよりもそういう経験をさせないといけないとあらためて思いました。

■ 「参加者からお話を伺ったの感想」

朝岡：何度か中貝さんのお話を聞いたことがありますが、今日のお話を聞いていて、いろんな意味で豊岡市にとっての転機を迎えられているような気がしたんです。要するに、中貝さんの「コウノトリの物語」という言い方がとても重要であると。わたしは長野県飯田市に行くのですが、あそこには「りんご並木物語」というのがあって、やはり、物語が生まれることによってまちづくりのベクトルがしっかり定ま

る、と言ったことがある。今回のお話を聞いて思うのは、小学生の子どもが登場することによって物語がずっと培われきて、新しい段階に入っていく。そして、ちょうど新しい段階に豊岡市も入り始めていて、その方向性を市長がどれだけ明記されるのかが期待されているな、といった印象を持ちました。

そういう意味で言うと、あらためて笹川先生と話めていただきたいのですが、「自治体認証」は大事なかもしれない。つまり、コウノトリや湿地だけではなくて、それによって豊岡がどれだけ魅力的な自治体づくりをできるのか、ということです。いまいちどまちづくり市民アンケートを拝見したところ、医療が1つのポイントになっているような印象を受けたのですが、そうすると直接コウノトリと医療はつながらないような気がするのだけれども、コウノトリを中心としたまちづくりをすることによって、どのように医療整備を整えることができ、健康が増進されるのか、といった考え方もできると思うのですよね。だから、そういう意味では、豊岡市のまちづくりが重要で、面白い段階に入ってきたのではないかと、思っています。

日置: いまのストーリーという話に付け加えて、ナラティブ（語り）を作ってきた、という感じがしますよね。わたしは理科教育学を専門にしていますが、学習指導要領で理科のカリキュラムを作る時に、いつも東京大学などの理学の先生から非常に「科学、科学」と言われるのですよね。確かに科学はとても大切なものだけれど、小学校の日本型の理科はもちろん「科学」で、科学的に見ることも大切なものだけれど、もうひとつは自然をどんな風に見るか、ということも大事ですよね。つまり、日本的な理科には自然（じねん）的な味方、考え方といったものをいかに埋め込んでいくかということです。

ロジカルで、なおかつ、エモーショナルという感覚が両方あっても良い。共生（共に生きる）というのは、サイエンスと自然的といったそれらが2つあつての考え方だと思います。共生をどんな風に捉えるかということが課題となつてきて、それをこの豊岡でコウノトリをシンボルとしながら、生き方として、まちづくりとして取組みを進めてきたということを受けて、私にとってもとても勉強になりました。

提言としては、学校教育のカリキュラム、あるいは子どもたちにとって、サイエンスと、また自然的なものを同時に意識して、あるいは二元論ではなくて、「自分は自然の一部である」といった信念や思想を培っていく、ということに取り組まれると良いのだろうと思います。それはこれから日本の良い意味でのリーダーを育てていくのではないかと思います。そして、それが教育の世界まで、すごく良い意味で、波及できるマインドを持っているなと感じました。

中貝: 小・中学校では副読本を使っていて、豊岡はどんなに素敵なお話かという本です。その柱のひとつがコウノトリで、コウノトリのことをかなり詳しく勉強できます。それもよろしければ差し上げます。

石山: わたしは自治体の財政とかを研究していて感じるのですが、いま、かなり自治体が数字で物事を考え、数字でいろいろな物事を動かそうとしている中で、先ほどのエモーショナルや、お話の中で聞いた言葉としては情念といったことで自治体を動かそうとしている、そこについていく取組みということが、なかなかユニークであると感じました。でも、本来、自治体やまちや地域というのは、そういう風に行っているはずだということを、あらためて感じました。

中貝: 結構、数字にはこだわっているのですよ。どのくらい輸出するとかですね。

というのは、環境保全の取組みというのは、どちらでもない人とか、敵も味方もつけないといけない、といったことがあります。味方だけでやっていると、純粹さを競うようになって分裂しちゃうということがある。お金しか関心がない人でも環境を良くする行動に加わってもらおうというのが、したたかな戦略です。環境経済戦略とはそのような考え方に立っています。お金にしか興味がない人には、「環境をよくすれば儲かるのだよ」と言います。ひとたび取り込んでしまうと、もっと儲けようと思って、自然や環境のことを勉強し始めるのですね。勉強し始めると賢くなってきて、ミイラ取りがミイラになるのですよ。そのため、「経済的にもこれはいける」、ということをかかなり意識して見せるようにしてきました。その人たちが時間をかけて変わっていくことを待つ、という長期戦略でもありますかね。それは、お米の認証制度などの環境の取組みの実績からもわかっていて、どのくらい儲かるという数字もしっかりと出しています。

笹川：米の海外輸出はすごいな、と思います。4、5年前はまだそこまでいってなかったという印象があって、今回はそれこそ数字で出てきて、お米に関しては、なかなかこれはいけるかもという印象を受けました。

田開：わたしは5年前に豊岡市から研究助成をいただいて、まさに豊岡で学ばせていただいて、育てていただきました。コウノトリが棲める自然環境をテーマに調査を続けてきたのですが、よくよく考えてみると、コウノトリも棲める（人間にとっての）地域・自治体であったということが、あらためて分かりました。豊岡市には、わたしのような若い研究者、学生も受け入れてくれるような、おおらかさがあって、そして、それに対するお金もしっかりある。そのような中で、地域・自治体づくりという観点からも、豊岡市は非常に強い力を持っていて、そこに集まってくる人やここに住む人や子どもたちがしっかりと育っている。また、その営みの中では、単なる自然体験活動に留まらず、世代間の交流や外部の人たちとの交流などが展開していて、いろいろな人たちが交わる中で学び合っていくといった土台が、豊岡にはあるのだと確信しました。

河村：わたしも2年前に豊岡に来たときには、コウノトリを増やしたいといった思いの側面ばかりを見て来たのですが、今日、あらためていろいろな市の取組みを説明していただいて、コウノトリを活かしたまちづくりがされていることをとても感じました。2年前にも副読本や子どもたちに対するコウノトリの教育がものすごくしっかりしていたことに驚いたのですが、それが着実に伸びて広がっていることを感じて、私自身のこれからの研究テーマにしてみたいと思っています。

笹川：7年くらい前に、中貝さんに習志野市に来てお話をさせていただいたことがあって、ある NGO の方が「豊岡市環境経済戦略というのは、一応、環境とは言っているけれども、経済の話ばかりじゃないか」、というようなコメントをされました。その時に、中貝さんが烈火の如く反論して、「いくら良いことがあっても、お金が回らなければ持続できないでしょう」、と記録にはなっていると思いますけれども、そのときの中貝さんの熱気をいま思い出しました。

環境というとお金のことを計算しないで、ということもあるけれども、やはり、どうやって飯を食べていくのかということ抜きにして、環境と言ってもしょうがない側面もあるのだろうな、と思います。ま

だ道半ばだということはありますが、豊岡市は、環境経済戦略ということで文章にして、歩んでこられたことに感心いたしました。もちろん、優秀な職員の方々がいてはじめて成り立つことだと思うのですが、さきほど朝岡さんや中貝さんから「次のステージ」というお話もあったように、「環境」とか「ラムサール条約」といったことは「経済」と関係があり、全国の自治体の中に少しずつそういったことが広がっている、と感じています。それは自治体の中にこれまで考え方としてなかったわけではなくて、いうまでもなく、自治体は地方自治体法第1条の広い意味での「福祉」の話であるから、そういうことも含めて、豊岡市がある意味では日本、世界の先頭になっているということであらためて感じました。

本当にご苦労が多いこともあるけれども、そういうステージになってきたんだとあらためて実感したと共に、大変有意義なヒアリングになったと思います。長時間、お忙しいところありがとうございました。

以上

注1 「豊岡自然再生アクションプラン」では、市内全域（市街地、山地を除く）において、繁殖に良い影響を与える環境条件の程度を高・中・低スコアの3段階に色分けして、生息適地マップを作成している。また、この結果に対して、別の調査でまとめたコウノトリの人工巣塔の繁殖成功率の評価（利用頻度）を重ね合わせたところ、高スコアの生息適地とコウノトリが高頻度で利用しているエリアが概ね一致したため、解析結果の生息適地マップは一定の信頼性があると判断している。本ヒアリングでは、この判断を参考に、コウノトリの生息適地の環境条件の程度だけでなく、生きものが豊富であるか否かの指標として「A～Cランク」と表現される。

また参考までに、具体的な解析方法は、豊岡市内に設置されている人工巣塔21本の、巣塔ごとの繁殖状況を計算して（繁殖成功率（巣立ち成功年数/巣塔設置年数））、繁殖成功率の高い巣塔周辺の環境（地形）の特徴・条件を解析する。調査した環境条件は、土地の利用形態7項目、地形4項目の計11項目（①水田面積②湿地・ビオトープ面積③水路長④幅員5.5m以上の道路⑤コウノトリ育む農法田⑥水田魚道⑦竹林面積⑧河川の長さ⑨山際の長さ⑩山際部の面積⑪地形の開空度指標）である。そのうち正の相関関係を持つ環境条件は、①（巣塔から300m以内の水田面積）、②（巣塔から300m以内の湿地・ビオトープ面積）、④（巣塔から500m以内の幅員5.5m以上の道路）、⑤（巣塔から500m以内のコウノトリ育む農法田）、⑨（巣塔から500m以内の山際の長さ）、⑪（巣塔から500m以内の地形の開空度指標）の6項目であった。以上の条件から、コウノトリの繁殖場所として良いとされた場所は、「人里近くの開けた場所で、水田や湿地が多く、コウノトリ育む農法水田が多い場所」と推定され、また、幅の広い道路は、あまり阻害要因にならない可能性が高いことが示唆された。